

地図のない道

法律事務所職員

池内 秀佳

あらためて、今思うこと

現在の事務所に入所して11年。弁護士の魅力的な人柄や事件に対する真摯な姿勢に接し、その後ろ姿を追いながら過ごしてきた。その間、公害・薬害等の社会的事件や、個々人が抱える多くの問題を通じ、時の社会をダイレクトに映した出来事に思うことが多々あった。今、あらためて振り返り行きつく思いは、「人の一生とは何と多様で、それぞれの人生を皆必死に歩んでいるのだろうか」ということである。

地図のない道

私たちひとりひとり、一度きりの「生」という地図のない道を歩いている。そしてそこには決して正しい道などなく、それぞれの選ぶ道があるだけだ。法律事務所に足を運ぶ方々は、抱えきれないほどの荷物に困惑し、この先進むべき道を選択するためにいらっしゃる。

私たちはもちろんひとりの孤独な人間であるけれども、他者との関わりなくして生きていくことはできない。そして、そこに摩擦が生じてしまうのは仕方のないことだ。摩擦が生じない世界はどんなに幸せかとも思うが、かといってそれは情のない、他人に無関心な世界とも通じ、そんな上っ面な世界になってしまったらと思うと、逆にぞっと

する。

その摩擦に疲弊した依頼者にとって、弁護士は「最善の道」を指し示す案内人となる。しかし「最善の道」とは依頼者の全ての要求を叶えるものではない。実際、私たちは矛盾に満ちた思いを併せ持っており、依頼者もちろんそうだ。その全ての感情を充たしてあげることは困難であるし、岐路に立たされた時、何をおいても大切なことを選択する明快な道を指し示されることで依頼者の心は楽になるのだと思う。

仕事を通じての喜び

私たち事務職員は、弁護士をサポートする立場から依頼者の人生に触れる。なかなか思うように事は運ばず、指の間からこぼれ落ちる砂をただ見つめているかのような無力感を味わうこともある。しかし、依頼者の方々の顔つきが徐々に明るくなり、視線を上げ、未来を見つめ始めた時、私たちは弁護士を通して「ほんの少しだけでも役に立った」と思える。

自分にとっては、本も音楽も絵画も、家族や友人も喜びをもたらしてくれるものだ。けれど、「誰かの役に立てた」という思いにまさる喜びはない。そんなふうに思えたからこそこの仕事を続けてきたように思うし、そしてこの先もその喜びを味わうためにこの仕事をつづけていきたいと思う。